

ビジュアルと言語表現の融合におけるデザインの可能性

－「俳句とコピーライティング」の効果的な教育指導法を目指して

柴田奈美・桑野哲夫・木塚あゆみ

1. はじめに

デザイン学部造形デザイン学科専門科目に、平成19年度から「俳句とコピーライティング」が演習科目として加わった。授業の目標は「言語表現に興味を持ち、積極的に俳句創作、キャッチコピー創作を行うことを通して、コピーライティングの必要性を理解し、言語感覚を身に付ける」というものである。しかし、言語表現に対して苦手意識を抱く学生が多く、授業では動機付けの工夫が必要である。

平成19年度、20年度の授業で、「俳句作りと句集の装丁」という、言語表現とビジュアル表現を融合させた課題を出したところ、学生は熱心に取り組んだ。この方向で授業研究を重ねていくことは、有意義であることを授業を通して確信した。

デザイン教育において、モノをよく見ること、視覚で捉えた内容を言葉で表現すること、また言語表現をビジュアル表現に変換する訓練は意義あるものと考ええる。そこで、コミュニケーションデザインを専門とする桑野哲夫教授、情報デザインを専門とする木塚あゆみ助手、日本文学（特に俳句）を専門とする筆者が協力して、未だ先行研究の少ない「ビジュアルと言語表現の融合におけるデザインの可能性」というテーマで、教材開発の研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、次の3点である。

第一は、学生の感性を磨き、文章力・観察力・イメージ力・表現意欲を高める教材を開発することである。平成20年度の学生作品を、ビジュアル表現と言語表現の面から分析し、優れている点や改良すべき点を明らかにする。それをパワーポイントに取り組み、学生に提示できる教材に仕上げる。また、すでに商品として販売されている句集や詩集、写真集などを入手して分析を行い、学生に提示できる教材に仕上げる。

第二は、授業「俳句とコピーライティング」の授業者のコメント能力を高めることである。ビジュアル表現と言語表現を同時に分析していくことにより、授業者が両者を融合した作品への的確な評価を行い、具体的な助言が行えるようになることを目的とする。

第三は、「文章のビジュアル化」「ビジュアルの文章化」という視点で、新たな教材研究の方向を見いだすことである。

3. 研究計画

平成21年

6月～7月 情報収集・資料収集

8月～9月 学生作品分析・教材作成準備

9月～10月 研究報告記事執筆・教材作成

11月～翌年3月 新たな教材研究の方向の検討

4. 研究方法

平成20年度の学生の作品を、主としてビジュアル表現の面から分類し、分析を行って作品の傾向を探る。

5. 研究結果

平成20年度の学生の37作品を分類したところ、次のような結果であった。（図6参照）

- (1) イラスト系（抽象表現を含む）……「ポケット」「姿」など14作品
- (2) タイトルと構成的表現……「深々」「静夜」など9作品
- (3) 写真と文字の組み合わせ……「薄氷」「炭火と醤油」など7作品
- (4) 言葉をビジュアル化したもの……「這い出る」「めじるし」など5作品
- (5) 文字をビジュアル化したもの……「影」「白菜」の2作品

一部の作品の解説を次に記しておく。

①「ポケット」大野博子（図1参照）

ランドセルを背負った少年が、ポケットに手を入れて立っている。帽子を目深に被り、下を向いているので表情は分からない。膨らんだポケットの中を想像させるイラストである。そこで、帯に目を移すと「ポケットに入ったままのくぬぎの実」の俳句があり、ポケットの中味の種明かしがされている。さらに帯文には「誰でも過ぎ去ってしまった昔を懐かしく思うことがあるように、この句集をひらいてもらいたい」とある。昔を懐かしむ思いを「ポケットの中を探るように」という比喩表現でうまく纏めている。「くぬぎの実」は単なるモノではなく、幼い頃の大切な思い出の象徴であったのである。帯文まで読んだ時、イラストの淡い水彩表現は、昔を懐かしむ思いを表現したものであることが納得できる。

②「深々」佐々木 愛（図2参照）

幾何学的なモノトーンの画面の中に、淡いローズ色の「深々しんしん」というタイトルが目立つ。哲学的な印象を抱かせる装丁である。帯に書かれた俳句は「静けさや冬ざれの道闇深く」である。「静けさ」「冬ざれ」「闇」とマイナスイメー

ジの言葉が続く。タイトルの「深々 しんしん」は、副詞「しんしん」の「しみこむようにひえるようす。雪がしずかに降りつもるようす」の意義に通じるもので、俳句に表現された「静けさ」「冬ざれ」のイメージにも重なっている。帯文には「冬の静けさの中で少しずつ積もってゆく孤独感。／深い闇に眠り、春の眩しさに目覚める」とある。「少しずつ積もっていく」「暗い闇」という表現がタイトル「深々」と響きあっている。「春の眩しさに目覚める」という表現には、俳句には語られなかった救いを感じられる。この帯文まで読んだ時、タイトル「深々 しんしん」の色だけが淡いローズ色であったことの真意に気づく。

③「薄氷」川西吾梨紗（図3参照）

青と白を基調とした氷か水のイメージ。具象と抽象の間のようなビジュアル表現で、内面的なものを感じさせる。静かで緊張感の漂う写真映像と、楷書で白く書かれたタイトル「薄氷」、名前、代表句との釣り合いがうまく取れている。代表句は「薄氷にほどけて返る日の光」。タイトルは「薄氷」であるが、句の中心表現は光であった。写真の中央部分が白いのは「薄氷に反射する日の光」を表していたのだ。帯文には次のようにある。「呼吸が白くそまるような、／ぬくもりの中の冷たさ。／はりつめた空気に切り込む薄い刃は、／独特の色彩を伴っている。／淡く繊細でありながら鋭く光る言霊の内に、／あなたもきつと包まれてしまうだろう。／帆立又七郎」。俳句に表現された「日の光」は、「薄い刃」「鋭く光る言霊」とイメージをずらして句集の推薦文（「帆立又七郎」は架空の人物）に使われている。写真表現と文章表現とが同じ方向性を持ちつつ、効果的に融合できた作品であると言える。

④「這い出る」王 子穂（図4参照）

文字の作り方がユニークである。地上に這い出る蟻を文字に群がらせることにより、文字とビジュアルの一体化がなされている。帯に記された俳句は「団栗を這い出る虫や朝日射す」である。「這い出る」という表現はタイトルと一致しているが、俳句に詠まれた「虫」は蟻ではなく毛虫である。俳句とビジュアルがそのまま重ならないところに、イメージに広がりが生まれた。帯文には「どことなく寂しい。／一人のときに気づくもの。／溢れ出すなにか／思い出して」とある。ビジュアルの蟻が這い出て群がる様子と帯文の「溢れ出す」が響き合っている。一部に呼応するところを残しつつ、表現をずらしてイメージを広げていく方法は秀逸である。また、文字の線をだぶらせている点は、従来の文字のイメージから脱却できている。暗い所から明るい所に出た瞬間の印象を、この線のだぶりで表現したものと推察される。この装丁を見た人は、一瞬見間違いかと見直すであろう。見る者に何らかのアクションを起こさせる仕掛けである。

⑤「影」岩城 光（図5参照）

タイトルは目立たせるものという発想を逆手に取ったように、

タイトル「影」を暗く暈している。グレーの正方形を重ね合わせており、心理的なものを表現しようとする意図が感じられる。帯は右を広くして、代表句「冬の雨／ザワザワ膨らむ／部屋の影」を改行して大きめに表記。字をグレーでだぶらせて表現している。これは代表句の「ザワザワ膨らむ／部屋の影」を文字のビジュアル化によって表現したもの。また、「部屋の影」という表現から装丁を改めて鑑賞した場合、障子の棧に「影」という字を入れ込んだようにも思えてくる。帯文はかなりポイントを落とし、帯の高さが左に行くほど低くなるのに合わせて、次のように表記している。「光のある所に必ず表われる『影』／／この世界には／光りによって生じる『影』だけでなく／人の心から生まれる／目に見えない『影』が静かに寄り添い／存在している」。この「目に見えない『影』が静かに寄り添い／存在している」の表現を、グレーの正方形の重なりで表現していたことがわかる。なお、作者の名前は「光」であり、タイトルとの呼応を意図したものであることが窺える。

6. 結論

学生の装丁方法を分類した結果、上記の5種類となった。一番多いのは、「(1) イラスト系」で14作品。もともと絵を描くのが好きな学生が多いためであろう。次が「(2) タイトルと構成表現」の9作品。続いて「(3) 写真と文字の組み合わせ」の7作品。これらは大学に入学後、「平面構成演習」(1年)「ビジュアル表現演習」(1年)「フォトデザインa」(1年)といった授業を履修したためであろう。「(4) 言葉をビジュアル化したもの」は5作品。「文字をビジュアル化したもの」は2作品であった。どちらも文字そのものをビジュアル化ということで、統合すれば7作品となる。これは、「タイポグラフィ」(1年)を履修したためと考えられる。他の授業で学んだ技術を、うまく取り入れられていることが指摘できる。ただし、代表句の俳句表現の仕方にビジュアル化のなされていないものがほとんどであった。これは、見本として提示した句集に示された代表句の表現の仕方が画一的な活字であり、これによってイメージの枠ができ上がってしまったものと考えられる。

今までに学んだ様々な手法の中から、作品（代表句の表現方法も含めて）に相応しい手法を見つけ出し、従来のビジュアル表現にこだわらぬ、新たな表現を開拓するように意識させるために、導入部分での適切な指導が大切である。今後、既存の詩集や句集の装丁で、言葉や文字のビジュアル化のなされているものを、時間をかけて収集して教材として蓄積していくことが必要である。

(1) イラスト系 (14作品)



<ポケット> <姿> <かなでる> <冬の反射光> <おもいびと> <組み体操> <こころカレンダー>



<アワセカガミ> <マフラー> <冬の唄> <いつも> <ひきだし> <わたくしをよぶ> <少年>

(2) タイトルと構成表現 (9作品)



<深々> <静夜> <ふゆごもり> <つきあかり> <とりどり> <帰り花>



<くしゃみ> <呼吸> <すきとおる>

(3) 写真と文字の組み合わせ (7作品)



<薄氷> <みそしる> <炭火と醤油> <ココア> <空に響く> <船笛> <思い出とか、時間とか>

(4) 言葉をビジュアル化したもの (5作品)



<這い出る> <反抗期叙情> <めじるし> <こおろぎ> <チャイム>

(5) 文字をビジュアル化したもの (2作品)



<影> <白菜>

*ビジュアルと言語表現の融合におけるデザインの可能性 柴田奈美・桑野哲夫・木塚あゆみ